

孫在賢著『韓国語諸方言のアクセント体系と分布』 に対する懸念

金, アリン
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/3077406>

出版情報 : 文献探究. 57, pp.48-38, 2019-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

孫在賢 著

『韓国語諸方言のアクセント体系と分布』

に対する懸念

金 ア リ ン

1. はじめに

本稿で扱う孫（2017）『韓国語諸方言のアクセント体系と分布』（以下、本書）は、その著者である孫在賢氏が自身の博士論文（孫 2007a）および、これまでに発表した論文と学会発表の内容に基づき、そこで得られた結果を整理したものである。本文は日本語で書かれており、第45回金田一京助博士記念賞（金田一賞）を受賞した。

本書は何か新たな理論を作り上げていくという理論志向の内容ではなく、記述をしてそれを分析するというのが個々の方言ごとに繰り返されるという記述志向の内容である。本書の「まえがき」（p.3-p.7）には孫氏が明らかにしたとする内容が簡潔にまとめられている。一部を要約すると、朝鮮半島東南部の慶尚道方言については、共時的観点から調査を行い、慶尚道方言の下位区分と地理的分布を明らかにした。朝鮮半島中央東部の江原道方言については先行研究ではほとんどの方言が無アクセントとされていたが、孫氏の調査で三型アクセントおよび二型アクセントが広く分布していること、さらには慶尚道方言・咸鏡道方言との規則的な対応を明らかにした、等である。

しかし本書は、細かな分析や内容に触れる以前の大きな問題を複数抱えていると筆者は考える。本稿では筆者が特に大きいと考える問題に焦点をあてて論じる。大きくは3つあり、内容構成、調査方法、そして先行研究の取り扱いに関する問題である。特に本稿の2.2節で扱う本書の調査方法に関しては、韓国語に詳しくない読者だと気づけない問題だと思われるので強調しておきたい。

2. 本書の問題点

2.1. 内容構成について

2.1.1. 本書全体としての論

本書全体としてどのような知見が得られたのかについて、あるいは本書全体を通じての論というものが書かれていない。本書には内容を総括する章が存在しない。韓国語諸方言の「アクセント体系」（観察し得たピッチパターンをアクセント型ごとにまとめた

もの)が多くの方言について示されているが、それらを並べてみたときにどのような結論が得られるのか書かれていない。また、『韓国語諸方言のアクセント体系と分布』というタイトルであるのならば、個別方言のアクセント体系からだけではなく、全体の分布からも議論をして欲しいところである。韓国のどの地域にどのようなアクセント体系の方言が分布しているのかをわかりやすく示した上で、それらの分布が全体として何を物語るのかを述べるべきである。しかしながら、本書には調査地点をまとめた地図や、韓国のどの地域にどのアクセント体系(たとえば、三型アクセント体系、四型アクセント体系、など)の方言があるのかをまとめて見ることのできる図表も存在していない¹⁾。

2.1.2. 資料の提示

「現在まで、韓国国内の六十ヶ所以上」(p.3)で調査を行ったということもあり、本書中でアクセント体系が示されている方言は非常に多い。しかし、一次資料が示されている方言が少ない。ここでいう一次資料というのは、例えば、調査語彙ごとにアクセント型を記した一覧表のようなもので、一般に読者はそれをもって本の記述・分析が妥当かどうかを判断する手がかりとする。本書には唯一大邱方言の一次資料が示されており、付録の「韓国語のアクセント調査のための調査項目リスト」(p.239-p.312)に見ることができる。他の方言の一次資料はなく、語例の提示にとどまっている。本書の p.239 に孫氏の手によるアクセント資料(一次資料)が載った文献が紹介されているが(Son2007b、孫 2008、2009、Son forthcoming²⁾)、これらの資料に掲載されているのは江陵方言、密陽・昌寧方言、三陟方言、加えて近刊のタイトルから見て釜山方言にとどまると思われる。これらの方言を加味しても本書でアクセント体系が示されている方言の5分の1に届かない数である。もっとも、アクセント研究の論考で一次資料を付けないというのは孫氏だけの問題ではないことも事実である。学術論文では枚数制限があるというのが最大の理由であろうし、アクセント研究(者)全体の課題ともいえるものである。それでも単著の書籍であれば紙幅の制限も緩やかであろうから、先行研究で未調査であった方言や先行研究と分析が異なる方言に限定するなどしてでも、本書でもっと多くの方言について一次資料を示したほうが良かったのではないか。孫氏が持っている一次資料は今や消滅危機にある方言アクセントの記録という観点からも貴重な資料であるに違いない。今後、できる限り公開して頂きたいと思う。

2.2. 調査方法について

孫氏が行っている方言アクセント調査の方法について明らかでない部分がある。具体的には、話者が発音したのが方言形なのか標準語形なのかは本書には明示されていない。念のために孫氏の過去の著作にもあたったが、明示されていなかった。調査方法が明示的に書かれていないということは言うまでもなく問題である。得られたデータがどのよ

うな性質のものかわからず、他の資料と比較検討する際などにどのような位置づけで考えたらよいか読者にわからないからである。本書に収められている諸方言に限っても、並行的に比べて議論してよいのかどうか、読者として確信が持てない。孫氏が何か一貫した調査方針で調査したデータを比べて本書中で議論しているのであれば、その方針を書くべきである。韓国語の方言アクセントを調査した研究のなかにも、福井（1998）のように方言形の調査を原則としていることを明示しているものはある。

(1) 福井（1998: 95）の「附録－光陽市津上面のアクセント資料」より

見出し語はすべて標準語形であげているが、方言形がこれとは異なる場合には⇒で実際の語形を指示してある。指示された方言語形も検索の便のため、見出し語に加えたが、標準語形と区別するため、1字分字下げして示してある。なお、標準語形と方言形を両方使う場合には、あるいは少なくとも両方ともさほど不自然ではなく発音できる場合には、アクセントの表記は双方に与えてある。方言形しか使わない場合には、標準語形のところではアクセント表示は行わず、方言形への指示だけが与えてある。なお、方言形は可能な限り聞きだすように努めたが、必ずしも徹底しておらず標準語形も混じっていることをお断りしておく。

調査語彙について推察するに、孫氏の基本的な方言アクセント調査方法は標準語形（≡ソウル方言形）を話者に発音してもらって調査方法である³。筆者の推測が入るので、慎重を期して以下で根拠を複数挙げる。

まず、上でも述べた、本書で紹介されている孫氏の手による一次資料が掲載された文献3つ（江陵方言：Son 2009、密陽・昌寧方言：孫 2008、三陟方言：孫 2007b）を見ると、リストにある語のほとんど全てが標準語形である。さらに、金（2017）でも指摘したように、江陵方言のような複数の方言辞典（김인기 2004、2014、박성중・전혜숙 2009）が存在し、標準語とは音形が異なる語が多数存在していることが明らかである方言についても、孫氏の一次資料に出てくるのはほとんど全てが標準語形である。なお、孫氏が調査した江陵方言の話者は現在70歳近い方であるので、方言形をほとんど使わない言語生活をしているとは考えづらい。さらに、孫氏の博士論文（孫 2007a）に付録として掲載された大邱方言の一次資料の項目には方言形を意味する「(方)」という印が用いられている場合がある。

(2) 孫在賢（2007a:126）より

(方) は、大邱方言で使われている方言形を意味する。

(3) 「(方)」が使われている箇所の例

No.	文字表記	音素表記	意味	大邱方言
720	장구	tʃaŋ.ku	(民俗)チャング	2C
721	(方)저분	tʃɔ.puun	箸	2C
722	저울	tʃɔ.ur	秤	2C

この「(方)」が付いているのは付録の全 1125 項目中 7 項目のみで、全項目の 1% にも満たない数であり、もし方言形を中心に調査しているのであればこのような記載は不自然である。同じ大邱方言の一次資料には、「→」の記号も使われており、話者が教示してくれた参考情報となっている。

(4) 孫在賢 (2007a:126) より

→は、提示した項目に対して話者が教示してくれた参考情報を表わす。

(5) 孫在賢 (2007a:149) より⁴

No.	文字表記	音素表記	意味	大邱方言
772	나방	na.paŋ	蛾	2D
→	나매이	na.pei		3D[x]

この参考情報を表わす矢印は 154 あるが、矢印の先に書かれているのはほとんど (135/154 語) が方言形と思われる (=標準語形ではない) 語である。これは、孫氏が標準語形を発音してもらう調査をしている中で話者が日常使うものとして教示してくれた方言形であると考えられる。加えて、孫氏の最近の著作のなかには論文のタイトルに “The accent of Korean native nouns”が入っている方言アクセントについての論文 (Son and Ito 2016)があるのだが、そこで挙げられている語例を見てもほとんどが標準語形であり、孫氏 (および、Son and Ito (2016) の共著者である伊藤智ゆき氏) が “native word” (固有語) と呼んでいるものは漢語ではない標準語 (≡ソウル方言) 形の語彙で、各地域のいわば「方言の固有語」のことを指しているわけではないと思われる。なお、孫氏の博士論文および本書には方言辞典などの方言語彙に関する資料⁵が一冊も引用されていないことも付け加えておく。

続いて、標準語形を発音してもらう調査が抱える問題を 2 点述べる。まず、標準語形を発音してもらう調査をしたとしても、共時的に特定方言の話者が (標準語的なアクセントも含めて) 発音し得るピッチパターンを全て表出させるという目的なのであれば必ずしも問題ではない。孫氏は方言ごとに数千単位の語数を調査しているので、方言形にこだわらずとも良いかもしれない。しかしながら、本書が目的としている伝統方言の共時的アクセント体系を調べるには問題がある。標準語形を発音してもらう調査では調査語彙に話者にとっての外来語が含まれるはずで、その手法で表出させたピッチパター

ンにもとづくアクセント体系の記述・分析が、方言形を調査することによって得られる伝統的な方言アクセント体系の記述・分析と同じになる保証が無い。標準語形を発音してもらって調査をすると、方言話者が標準語も知っているとしても、話者にとってなじみの薄い（ない）外来語（あるいは無意味語）としてアクセントが付される語が紛れ込む可能性が排除できない。外来語のアクセントが固有語あるいは方言形の語彙とは異なるアクセント型や分布を示す場合が多いというのは、日本の諸方言のアクセント研究でも十分に知られた事実である（秋永 2014、木部・橋本 2003、Kubozono 2006、松浦 2014、小川 2012、など）。

次に、本書で孫氏が目指しているのは通時論をも志向した記述研究である。孫氏は付録に中期朝鮮語の情報を載せるなど⁶、本書からは通時論をも志向していることが明確に読み取れる。しかし、本書で示されているデータからは単純に通時論を語ることができない。標準語形中心で調べた本書のデータから通時論に関わる議論をするというのは、例えるなら、日本語の鹿児島（市）方言で「蠅」のことは「へ」というが、「へ」ではなく「はえ」という標準語形で話者が発音したアクセントを日本祖語のアクセントを推定するための資料として使うようなものである。基本的に祖語のアクセント推定に使えるのは祖語のアクセントから変遷を遂げたアクセント、いわば祖語との連続性があるアクセントである。その点で、外来語のアクセントにはそのような祖語からの連続性が保証されないのだから、外来語扱いされ得る標準語形を中心にアクセントを調べた資料をもとに通時論を語るのは危険であるし、説得力がない。もちろん、標準語形とそれに対応した方言形が類推などによって常に（完璧に）同じアクセント型で発音されるのであればいいが、その可能性は無いと言って過言ではない。それは方言アクセント調査をしたことがある研究者なら実感できることであり、本書で示されている資料からもわかる。本書の巻末には付録として「韓国語のアクセント調査のための調査項目リスト」がついている。

(6) 「韓国語のアクセント調査のための調査項目リスト」（全体は No.1~No.1388）の冒頭

No.	ハングル	音声表記	意味	1920	1933	1947	1960	1970	訓蒙字會	中期語辞典
1	각(角)	kak	角	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	각(去)	△
2	간	kan	味	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	△	△

リストは左から項目番号、項目（語）のハングル表記、項目（語）の音素表記、項目（語）の意味、示された生年の大邱方言話者のアクセント、および、中期朝鮮語資料 2 種類（『訓蒙字會』と『우리말근사전（“中期語辞典”）』）に対応する語があればその記述内容、

となっている。その中に、標準語形と方言形で異なるアクセント型を示す以下のような例が見られる。

(7) 2つの「おばさん」

1262	아줌마	a.tʃum.ma	おばさん	②	②	②	②	②	cf. 아즈미(平去去)	cf. 아즈미(平去平/平去去) 아줌(平去)
1263	아지매	a.tʃi.me	おばさん	①	①	①	①	①	아즈미(平去去)	아즈미(平去平/平去去) 아줌(平去)

いずれも「おばさん」という意味の同語源の語だが、No.1262が標準語形（標準語語彙）の/a.tʃum.ma/で、No.1263が（大邱）方言形（方言語彙）の/a.tʃi.me/である。両者のアクセントは全世代の話者で異なっており、前者には②、後者には①というアクセント型が記されている⁷。「おばさん」を意味する語は基礎語彙であり、通時論の議論にも用いられる可能性が高い語でもある。もし、この方言で「おばさん」を意味する語の方言形を収集し損ねて、「おばさん」のアクセント型は（標準語形で発音した場合の）「②」であると記述してしまったなら、通時論に対して間違った共時的アクセント資料を提示することになる。このように、標準語形をそのまま発音してもらう調査をすると、方言形を取りこぼす危険性が高くなり、方言形を取りこぼしは、上記のように標準語形と方言形でアクセントが異なる場合に問題となる。要するに、標準語形を発音してもらう調査から得られた資料は通時論の議論に用いるには危険すぎる。同様の理由で複数方言の比較に用いるのにも慎重になる必要がある。管見の限り、韓国語諸方言のアクセントについては、日本語の類別語彙（金田一 1974）や琉球語の系列別語彙（松森 2012）のような、通時論をも志向して作られ、かつ多くの研究者に認められた体系的な語彙リスト集が存在しない。孫氏が韓国語諸方言のアクセントについて通時論を志向するのであれば、そのような語彙リスト集の作成が必須であろう。しかし、本書の資料をそのような語彙リスト集を作るための材料にすべきではない。まずは、方言語彙（方言形）に重きを置いた調査にもとづくアクセント資料を集積すべきである。

多くの方言を調べて記述を試みた孫氏の研究は大変根気と努力を要するものであっただろう。しかし、本書の分析の信頼性をあげるためには方言形での調査が必要であり、その結果が本書に書かれている解釈と同じ、あるいは異なることを示さなければならないと考える。

2.3. 先行研究の取り扱いについて

本書全体に言えることだが、先行研究、とりわけ最近のものへの言及がない。もちろ

ん、1人の研究者が関連する全ての文献を網羅することは簡単ではないが、本書の参考文献欄に挙がっている文献には孫氏自身の論文を除くと、ここ10年の間に発表されたものが1つもない。最も新しい参考文献でも2006年発表のもの（姜2006、李2006）である。本書は韓国の広範な地域を対象としたアクセントの研究書であるから、日本と韓国で出されたものに限定したとしても、関連する重要な研究がこの10年間に1つもなかったというのは考えにくい。

実際、江原道の方言に関するものだけでも、筆者は複数の研究報告を容易に見つけることができた。単行本の최영미（2010、2015）が出版されており、もう少し前の学術論文で김주원（2003）などもあった。これらの研究報告を読むと、江原道の複数の方言にアクセントの対立があることが報告されている。2017年に出版された本書で「江原道方言は、ほとんどの地域がソウル方言と同様、無アクセント地域として扱われてきた。」（p.4）とだけ述べて、最新の研究成果に言及しないのでは、孫氏だけしかこの地域の方言アクセントの研究をしていないかのような誤解を生む可能性がある。本書の内容から判断すると、上述した孫氏の記述（「江原道方言は...扱われてきた。」）は20年以上前の時点での研究状況に基づいたもので、孫氏が最近の研究に触れていないことに起因する問題であると考えられる。

最後に、最近の研究成果を取り入れていればもっと議論が深められたであろうと考えられる部分もあるので述べておく。「N型アクセント」に関係する部分である。N型アクセントは本書にとって重要な用語（概念）である。孫氏は「アクセントタイプの分類に当たっては、上野善道（1984）の用語および定義を用いる。多型アクセントとは、語形の長さに応じてアクセントの対立数も増えていくタイプをさし、N型アクセントとは、語形が長くなっても一定数N以上には増えていかないタイプをさす。N型はアクセント体系を呼ぶときに用い、n型（えぬがた）は個々の型をさす。例えば、 $\sigma] \sigma$ 型、 $\sigma \sigma] \sigma$ 型など。」（p.23の注2）としていて、本書中では多くの方言が上野（1984）のN型アクセントの定義に基づいた分析がなされている。

N型アクセントについては近年でも上野善道氏の著作もあって、議論が深められているが、本書には1984年以降の議論や知見が踏まえられていない。上野（2012a）などに何かしらの言及があったほうが良いのではないか。実際、最近の知見も踏まえていればもっと意義深い議論ができたと考えられる以下のような事例もある。

近年に発表された研究の中で、N型アクセントに関して注目すべきものとして鹿児島県喜界島の湾方言に関する議論がある（上野1984、2012b、窪菌2011）。この方言のアクセントについて先行研究の分析に共通している点がある。それは、2つのアクセント型があるに加えて、一方の型は文節をドメインとしていてもう一方の型は語をドメインとしている点である。すなわち、アクセント型によってドメインが異なるのである。上野（2012b）の湾方言の分析には、7つの名詞（/Ka/（子）、/midu/（水）、/taTami/（豊）、

/miduKumi/ (水汲み)、/nabi/ (鍋)、/haTana/ (刀、包丁)、/muCjigumi/ (もち米) の、単独および助詞 (連続) を付けた場合の音調型が示されている。

(8) 上野 (2012b: 52) の湾方言の音調型⁸

	名詞	が	から	からも
α :	[Ka mi[du [ta]Ta[mi [midu]Ku[mi	Ka[nga [mi]du[nga [taTa]mi[nga [midu]Ku[mi[nga	[Ka]Ka[ra [midu]Ka[ra [taTami]Ka[ra [midu]Kumi]Ka[ra	[KaKa]ra[mu [midu]Ka]ra[mu [taTami]Ka]ra[mu [midu]Kumi]Ka]ra[mu
β :	[na]bi ha[Ta]na [mu]Cji[gu]mi	[nabi]nga ha[Tana]nga [mu]Cji[gumi]nga	[nabi]Ka[ra ha[Tana]Ka[ra [mu]Cji[gumi]Ka[ra	[nabi]Kara]mu ha[Tana]Kara]mu [mu]Cji[gumi]Kara]mu

α 系列は単語レベルでも文節レベルでも同じで、単語は裸の文節でもあるので、「文節がアクセント単位になり、その次末拍のみが低まる」と記述される。それに対して β 系列は単語レベルでの指定が必要で、「単語の次末拍 (-②) に昇り核 (//) がある」と解釈する。

α 系列が文節をドメインとし、 β 系列が語をドメインとしているとの分析である。このようなアクセントの分析がなされる方言は、現在報告されている日本語および琉球語の中でも珍しいものである。翻って、本書中にはこのような日本語および琉球語で珍しいとされるアクセント体系が複数見える。例えば、1.5 節の河東方言がその 1 つである。

(9) 河東方言の音調型 (助詞付き言い切り) と語例⁹

	1	2	3	4
①	H(H) pe 腹	HH(L) o.i キュウリ	HHL(L) mu.tʃi.ke 虹	HHLL(L) mu.tʃi.ke.sek 虹色
①	H(L) pe 梨	HL(L) u.ri 檻	HLL(L) si.kum.tʃi ほうれん草	HLLL(L) tʃoŋ.i.in.hjəŋ 紙人形
②	L(H) kjo: 宗教	LH(L) kjo.juk 教育	LHL(L) kjo.juk.pu 教育部	LHLL(L) kjo.juk.te.hak 教育大学
-②	—	LH(L) u.ri 私たち	LHH(L) pe.na.mu 梨の木	LHHH(L) ko.rjo.in.sam 高麗人參

①型は、原則的に第一・第二音節のみが高く現われる。一音節語は、単独言い切りでは①型との区別がないが、助詞付き形では H(H) となって①型の H(L) と区別される。

①型は、第一音節のみが高く現われるが、一音節語は、単独接続の環境でのみ低く現われ、HとLの交替形をもつ。

②型は、一音節語で軽い上昇調で現われるのみで、この上昇調は二音節単位以上では実現されない。それ以外は第二音節のみ高くあらわれる。

－②型は、低く始まり、第二音節から次末音節までが高く現われる。アクセント核は後ろから数えて二番目の音節にある。この型は、アクセント核とその位置を名詞に助詞（連続）を付けた文節単位で定めている点で、アクセント核を名詞に固定している他の型と区別される。

－②型は文節をドメインとし、その他の型は名詞（すなわち語）をドメインとしているとの分析である。この、アクセント型によってドメインが異なるという趣旨の記述は、統営方言（p.80）と居昌方言（p.113）、光陽市津上方言（p.184）の分析にも見られる。

日本では珍しいとされるアクセント体系が韓国でも見られるという報告そのものが興味深いし、そのような体系が韓国で複数見つかる理由についても孫氏には議論して欲しい。最新の研究動向を踏まえつつ、そのようなN型アクセントに関する報告と議論に踏み込んでいれば本書の価値は増していただろう。

3. おわりに

以上、本書の問題点について本稿では大きく3点述べた。本書は金田一賞の受賞作ということもあって、参考にしようとする人は多いと予想される。そして、本稿で言及した問題の中には韓国語および韓国の言語状況に明るい者でなければ気付くことができないものもある。韓国語を母語として日本で研究をしている筆者としては、読者、とりわけ韓国語がわからない読者が本書を活用しようとする際に、注意すべき点を知らせる必要があると考えた。孫氏には今後、一次資料の提示、方言形での調査、最新の研究成果を踏まえた分析を期待したい。

注

1 金田一京助博士記念会（2018）の「受賞理由」の中にも本稿と同じ趣旨の以下のような指摘がある。「最終章に他と異質な「韓国語諸方言一音節語幹用言のアクセント」を置くよりも、韓国語アクセント体系分布図を描いた上で総まとめをしていたら一書として完結したのにと惜まれる。」

2 本書の239pに「（近刊）「Accent Material in the Pusan Dialect of Korean」『アジア・アフリカの言語と言語学』12、東京外国語大学」と書かれているが、『アジア・アフリカの言語と言語学』12号にこの論文は収められていない。

3 調査中に話者から方言形を教示されるなどした場合は方言形もデータの中にも含めている。本稿は孫氏が意図的にすべての方言形を排除したと主張するのではない。

4 na.pei は原文ママ。

5 韓国語諸方言には『韓国方言資料集』や『한국언어지도 (韓国言語地図)』、『경북방언사전 (慶北方言辞書)』など、方言語彙に関する資料が多数存在する。

6 「筆者は、そのような朝鮮語諸方言のアクセントの記述研究を中心テーマとしており、なかでも、アクセント変遷のプロセスに重点を置いている。」(p.3)あるいは、「また光陽方言と麗水突山邑方言の両言語は慶尚道方言と対応関係にあることがわかった。このような現象は、ソウル方言の成立を推定するに当たり、非常に重要な糸口になると考える。」(p.5)とも述べている。

7 他にも、標準語形と方言形でアクセントが異なる例として、No.1190 /mo.t^huŋ.i/と No.1191 /mo.t^hi.i/(「曲がり角」の意)や、No.1091 /ko:m.p^haŋ.i(原文ママ)/と No.1092 /kom.p^he.i/ (「カビ」の意)がある。

8 上野(2012b: 52)ではβ系列について言い切り形と接続形の違いも示されているが、ここでの議論に影響しないので、語例は接続形を省いて言い切り形のみ引用する。なお、音素表記のアルファベット大文字は喉頭(緊張)化音(無気音)を表わし、Cjiは喉頭化した「チ」である。音調記号については、[: 拍間の上昇(上げ)、]: 拍間の下降(下げ)、である。語例の下のアクセント型(α系列、β系列)の説明文は直接引用である。

9 表については本書中「表 56 アクセント体系における語例」(p.97)と、「表 57 河東方言の音調型」(p.99)のうちの「助詞付き言い切り」の音調型を一つの表にまとめて示す。そして、本書には5音節語まで例示されているが、ここでの議論に影響がないので4音節語までを引用する。記号については、H: 高い音節、L: 低い音節、F: 下降調、R: 上昇調、(): 1音節助詞が付いた場合の助詞の音調型、である。そして、表の下のアクセント型(①、②、-②)の説明は直接引用である。

参考文献

秋永一枝(編) (2014) 『新明解日本語アクセント辞典 第2版』 東京:三省堂。

최영미 (Choi Yeongmi) (2010) 『정선방언의 성조체계와 그 역사적 변천』 서울:역락。

최영미 (Choi Yeongmi) (2015) 『평창방언 성조와 언어 분화』 서울:박이정。

福井玲 (1998) 「全羅南道光陽市津上面のアクセント」 『アジア・アフリカ文法研究』 27: 75-113。

한국정신문화연구원 어문연구실 (韓國精神文化研究院語文研究室) (1989-1995)

『韓國方言資料集』 全9卷 성남: 한국정신문화연구원。

姜英淑 (2006) 「韓国の山清方言のアクセント体系」 日本言語学会第133回大会。札幌学院大学、2006年11月19日。

木部暢子・橋本優美 (2003) 「鹿児島市方言の外来語の音調」 『音声研究』 7(3): 92-100。

金アリン (2017) 「朝鮮語江陵方言のアクセント再考」 『音韻研究』 20: 3-10。

김인기 (Kim Inki) (2004) 『江陵方言總攬』 서울: 한림。

김인기 (Kim Inki) (2014) 『강릉방언대사전』 서울: 동심방。

김주원 (Kim Juwon) (2003) 「강원도 동해안 방언 성조의 특성」 『민족문화논총』 27: 249-283。

金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究』 東京: 塙書房。

- Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116: 1140-1170.
- 窪菌晴夫 (2011) 「喜界島南部・中部地域のアクセント」木部暢子・窪菌晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子(編)『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究: 喜界島方言調査報告書』51-70. 東京: 国立国語研究所.
- 이익섭 (Lee Ikseop)ほか (2008) 『한국언어지도』 서울: 태학사.
- 이상규 (Lee Sanggyu) (2000) 『경북방언사전』 서울: 태학사.
- 李連珠 (2006) 「韓国語尚州方言のアクセントの特質」日本言語学会第 132 回大会. 東京大学, 2006 年 6 月 18 日.
- 金田一京助博士記念会 (2018) 「第 45 回金田一京助博士記念賞 孫在賢氏 『韓国語諸方言のアクセント体系と分布』に対して」<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/affil/kkprize/45.html#riyuu> [2019 年 3 月アクセス]
- 松森晶子 (2012) 「琉球語調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16(1): 30-40.
- 松浦年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』東京: ひつじ書房.
- 小川晋史 (2012) 『今帰仁方言アクセントの諸相』東京: ココ出版.
- 박성중 (Park Seongjong) · 전해숙 (Hyesuk Jeon) (2009) 『강릉방언사전』 과주: 태학사.
- 孫在賢 (2007a) 「韓国語諸方言アクセントの記述研究」博士論文, 東京大学.
- Son, Jaehyun (2007b) Accent Material in the Samcheok Dialect of Korean.『東京大学言語学論集 (TULIP)』26: 239-279.
- 孫在賢 (2008) 「韓国語密陽・昌寧方言のアクセント資料」27: 233-265.
- Son, Jaehyun (2009) Gangneung Dialect of Korean Accent Materials of Simple Nouns 『コーパスに基づく言語学教育研究報告』2: 143-177.
- 孫在賢 (2017) 『韓国語諸方言のアクセント体系と分布』ソウル: Chaek-Sarang.
- Son, Jaehyun and Chi-yuki Ito (2016) The accent of Korean native nouns: North Gyeongsang compared to South Gyeongsang. *Studies in Phonetics, Phonology and Morphology* 22(3): 499-532.
- 上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会(編)『現代方言学の課題 2 記述的研究篇』167-209. 東京: 明治書院.
- 上野善道 (2012a) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.
- 上野善道 (2012b) 「琉球喜界島方言のアクセント—中南部諸方言の名詞—」『言語研究』142: 45-76.
- 上野善道 (2013) 「総論と各論(喜界島・与論島方言)」日本音声学会第 27 回大会公開シンポジウム「N 型アクセントの諸相」における口頭発表. 金沢大学, 2013 年 9 月 29 日.

(きむ ありん・本学大学院博士後期課程)